

教職支援センター



ニューズレター



巻頭言

「18歳選挙権時代」の若者の社会参加と地域連携-「有権者」から「主権者」へ

2015年6月に改正公職選挙法が成立し、選挙権年齢が20歳以上から18歳以上に引き下げられたことは記憶に新しい。18、19歳の約240万人が新たに有権者となった2016年夏の参院選では、長野県に限って言えば、高校3年生相当の高い投票率は、県レベルと市町村レベルの選挙管理委員会や教育委員会が1年以上の時間と労力をかけ啓発活動に力を入れた成果の表れといってよい。一過性のものにならないよう継続性をもたせ、かつ、啓発の方法にも一層の工夫を重ねていくことが重要である。他方で、19歳を好例とする若年層の投票率は相対的に低かった。若年層の政治参加のあり方は、全国的にもまだ模索の段階にあるといえよう。

第1に、「有権者＝主権者」ではなく、18、19歳は制度的に「有権者」になったが「主権者」になったわけではない。このことは18、19歳に限ったことではなく、選挙権を有する全ての市民にとって、「主権者教育」という営為は、主権者として生きて行くために不断の努力が求められるという意味で「未完のプロジェクト」なのである。「シディンシップ教育」とも呼称される教育のあり方は、「生涯学習」という文脈から再考する必要があるかもしれない。

第2に、ポスト参院選の主権者教育は、いよいよ投票の「率」だけでなく「質」を高める取り組みも求められてくる。模擬投票の実施、選挙の仕組みや政治的争点だけを単純に知識レベルで習得するだけでなく、政治的争点に対する解決策の政党間の違いはなぜどのように生じるのかという思想レベルまで遡った検討、投票結果を踏まえた上での合意の方法や民主主義のあり方を議論するなど、多様なアプローチに基づく試みが必要となろう。一例として、学校が政治家自身を活用することを検討することはリスクもあるが議会にとっても「政治不信」を払拭し活性化させる起爆材になる可能性もあり、結果として民主主義の質を高める契機となりうる。他方で、先導的な取り組みを担保する一定のルールも必要となろう。多様な関係者の熟議を経ながら、教室内で「生の政治」を学ぶためのルールづくりの検討を推進していくことはできないだろうか。

第3に、公共政策上の課題解決の一案として、行政の審議会や協議会等への「若者枠」の創設を検討されたい。幸いなことに、信州には地域や故郷をもっと活性化していきたいと活動する若者が大勢おり、すでに多種多様な活動が展開されていることはより知られて良い。若者が行政の意思決定の過程に参加していく仕組みが「文化」として信州に根付いていけば、自分たちの活動と地域社会のあり方が密接に関係していることを若者自身が体感できるはずである。また、活動的な若者同士が情報交換・共有したり、地域や社会(政治)のあり方を議論できるフォーラムの定期開催も検討されたい。地域・全国ネットワークを駆使したイベントは同世代への波及効果も期待できよう。

最後に、高等教育機関に目を転じた場合、県内には、合計19の高等教育機関があるが、「18歳選挙権時代」に対する大学側の反応は中立性を意識してか、消極的であった。これについては、高等教育機関全体の課題として受け止めていく必要もあろう。教職支援センターの地域連携部門においても、上記の課題は真摯に受け止めていきたい。



地域連携部門長 荒井英治郎

教育実習事前・事後指導報告



4年生の教育実習に向けた「教育実習事前・事後指導」が、学部ごとに始まりました。9月27日に行われた、人文学部・理学部対象の第一回目では、この授業のねらいや基本的な心構えなどの説明に加え、4年生の先輩お二人がゲストとして参加（人文学部・村田拓海さん、理学部・鉄矢幸菜さん）、教育実習の面白さや事前の準備など、内容盛りだくさんの体験談を話してくれました。第一回目を受講するとき、学生はまだ3年生です。来年度にせまった教職課程の学びの集大成の機会に、不安も膨らむ時期だと思いますが、先輩達のリアルな話と、それでもやっぱり「楽しかった」という笑顔に、少し気持ちもやわらいだのではないのでしょうか。最後に、模擬授業のためのグループを作り、今後の予定をグループごとに計画して、第一回目は終了となりました。現3年生は、これから何度も模擬授業を通じて特任の先生方に鍛えられ、現場に臨むことになります。来年、今年の受講生たちが、先輩と同じように「楽しかった」と帰ってきてくれることを願っています。（河野桃子）



教職支援センター教員による研究内容紹介

[普通選挙運動に生涯をかけた中村太八郎]

7月の参議院選挙は、選挙権が18歳に引き下げられて初めての選挙ということで、「投票」や「主権者教育」は話題になりましたが、松本が普通選挙運動発祥の地ということはあまり語られなかったように思います。明治30年山形村出身の中村太八郎は、木下尚江らと松本で「普通選挙期成同盟会」を結成し普通選挙運動を開始、直後、東京にも拠点を置き、全国規模の運動へと展開しました。明治元年名主の家に生まれた太八郎は、少年時代に小作人の姿を見て「同じ人間に生れながら、小作人ほど哀れなるものはない。嘗々土に埋れて、牛馬の如く働き、動物のやうな暮らしをしながら、しかも一生頭が上らない。自分は、このやうな不公平な、いくら働いても頭があがらぬ人々のために、将来大いに尽さなければならぬ」と思い、私財を投げ打って普通選挙運動に没頭し、まさに新しい社会をつくるために生まれてきたような人物です。名刺の肩書きは、「日本帝国に於ける普通選挙の首唱者」、普通選挙運動の目的は「貧者、弱者、労働者、小作人および婦人の生活向上」のためとし、1925年男子普通選挙達成の中心人物でした。しかし、東日本無銭遊説旅行を挙げるなど、演説を精力的に行い、政財界や言論界の人々とも幅広く交流した太八郎ですが、筆をとることはあまりなく、どちらかというと活動のスタンスは黒子的であったことから、後世、太八郎の業績が語られることが少ないのが実際です。あらためて、太八郎の生き方を見直してみることも、現代社会では必要なことのように思います。なお、松本市立図書館には、普通選挙運動の資料が「普選文庫」コレクションとして集められ、敷地内には「普選運動発祥の地」記念碑が建立されています。※山形村の平成27年度地方創生交付金事業として「中村太八郎普通選挙運動にかけた生涯」(山形村教育委員会)を出版しました。(小山茂喜)



信州大学理学部は2014年の改組により6学科から2学科(数学科, 理学科)に再編されました。数学科では「数学」、理学科では「理科」に関する中学校および高等学校の教諭一種免許状を取得できます。また、大学院の数学分野では「数学」、理科学分野では「理科」に関する中学校および高等学校の専修免許状を取得できます。

教職支援センター兼務教員という立場を活用して、理学科2年生対象の「理科指導法Ⅰ」の授業(の内、長野県総合教育センターの専門主事の先生方が担当された11回分)に見学という形で参加させて頂きました。この授業の主な目的は教育現場で培った長年の経験に基づいて、現場感覚の授業を通して、理科の特性、教科性、教材研究の楽しさを伝えることです。自作の教材を通して五感で学ぶことの面白さと重要性とインパクトを実感しました。信州理科教育研究会編集の中学生向け「理科資料」の中にブタの目のくりぬき写真が載っていてドキッとしますが、実際に解剖する様子を目の当たりにするとは思いませんでした。虹彩や水晶体とともに先生方のお言葉(「教材は命」、「可能な限り実物で」、…)が脳裏に焼きついています。

(理学部・川村嘉春)



CST(コア・サイエンス・ティーチャー)活動報告

●「山形村リーダ養成通学学舎」での活動

平成28年8月28日(日)～8月31日(水)の4日間、家族と離れ、公共施設に寝泊まりをしながら通学し、リーダーとしての自覚や責任、集団行動を学ぶ子ども達のサポート活動を行いました。参加した学生は、全部で14名。専門を活かした実験の指導のほか、生活指導も担当させていただきました。



●「学都松本フォーラム 子どもプレイパーク」での活動

平成28年9月3日(土)・9月4日(日)の2日間、遊びに来てくれた子ども達を対象に、4つの実験を行いました。用意したのは、「金属板で簡易電池」「偏光フィルムで万華鏡」「ペットボトルで簡易万華鏡」「煮干し解剖」。楽しみながら理科に取り組む子ども達の表情に触れることができました。

(千村重平・河野桃子)



学生による学習ボランティア報告

3年生の夏季休業中に、信大病院の院内学級での学習ボランティアに取り組んだ。ここでは、入院中の中学生とともに勉強する機会を得られた。生徒たちは一人ひとり圧倒されるほどに前向きで明るく、たくさん元気をもたらした。また、楽しみながら勉強に取り組む姿勢に感動し尊敬を覚えた。勉強を教えるなかで、生徒一人ひとりの、考える過程や理解の仕方が大きく違うことに改めて気づいた。得意不得意の差や、知識や理解度の差もあり、様々な個があることを理解して、授業を行わなければならないと実感した。また、これは授業だけではなく、生徒指導も含めた教育全般にいえることだとも考えられる。

今回の取り組みを通して、生徒一人ひとりに向き合う教員として働きたいという思いがさらに深いものとなった。

(理学部4年 長嶋 恵里佳)





教職支援センター 授業紹介

今回は私が前期の夏季集中講義で行った「キャリア教育の理論と実践」の授業内容の一部を紹介いたします。この授業は教職科目としては選択必修の科目です。今年度の入学生から工学部の4学科(物質化学科、電子情報システム工学科、水環境・土木工学科、機械システム工学科)の学生に中学校の教員免許状取得の道が開かれたこともあって、受講する学生が昨年の約4倍(41名)になりました。

授業のねらいの一つは、学生に自分自身のキャリア形成を図ってもらうことです。キャリアサポートセンターの方々と連携を図り、リクルートキャリア(株)の戸石さんをお招きして、最近の大学生の就職状況、長野県内の民間企業の状況や自分自身を見つめることの大切さ(自分がやりたいことは自分が知っていることの中からしか生まれない。だからこそ様々な体験をすること、多くの本を読むことが大切である)を話していただきました。学生からは好評を得ました。

キャリア教育で育成する能力には「課題解決能力」「コミュニケーション能力」があげられています。本授業の実践編として、証券知識普及プロジェクトが開発したシミュレーション教材「ケーザイへの3つのとびら」の中の一つ「ワールドトレジャーランド再生計画」を行いました。これは高校生を対象に開発された教材ですが、経済学を専攻していない大学生にも十分活用できるものと思います。

教材紹介

4~6人でチームをつくります。メンバーは全員、ワールドトレジャーランドの役員です。取締役会で経営状況が思わしくないレジャーランドの経営を立て直さなければなりません。考えられる打開策は4つ(従業員の教育・宣伝に力を入れる・新たなアトラクションをつくる・無駄をなくす)ありますが、さまざまなデータを基にして取締役会でその中の1つをチームで話し合いながら決定します。それを選んだ理由も重要です。

次に、株主総会を開催し、どのチームの案とその理由が明確であったかを決定します。

最後に、役員会で決定した案を採用したことにより経営の正否を決めるカードを各チームに配布します。カードの左右どちらかに成功・失敗の内容が記載されているので最後まで気が抜けません。



4つの事業改革案のなかでどれを選択しても必ず上手いくとは限りません。

チームワーク(コミュニケーション)が重要であり、経営の難しさを感じさせるシミュレーション教材です。
(田村徳至)

教職支援センター6月～9月の動き

- 教職支援センター運営委員会が開かれました。(6/2)
- 長野県総合教育センターとの連絡会議が開かれました。(6/16)
- 教育委員会(松本市(6/14)・上田市(6/20)・長野市(6/22)・南箕輪村(6/22)・伊那市(6/28))を訪問しました。
- 校長会(長野市(6/14)・上小(6/20)・松本市(6/23)・伊那市(6/28))を訪問しました。
- CST運営会議を開きました。(6/29)
- 免許更新支援センター会議(6/29)・運営会議(7/1)を開きました。
- 上越教育大学来学(学生募集説明)(6/8)
- 教育実習校(県内)を訪問しました。(6月)
- 教員免許状更新講習を担当しました。(7月～9月)
- 長野県総合教育センター連携講座を開講しました。(8～9月)



編集後記

いよいよ後期が始まりました。専任教員・特任教員が隔地キャンパスに向かう曜日が前期とは異なりますが、今期も教職相談等の機会をしっかりと確保したいと思いますので、ご協力をよろしくお願ひいたします。もちろん、松本キャンパスでも、月～金まで教職相談を行っていますので、学生達へ、積極的な活用の周知をお願い申し上げます。
(広報担当:河野桃子)

